

伏見康治著作集

報 月
(2)
第2巻
1986・9

伏見先生にお近付きを得て

中村義作

伏見康治先生のお名前を知ったのは、私がまだ学生ときである。神田の本屋で何気なく買った『確率論及統計論』がすばらしい名著で、格調の高さと内容の深さにすっかり魅了されてしまった。かなりの時間と精力をかけて読んだが、この著者が伏見先生だったのである。こうして、遙かに高い雲の上の存在として、先生を憧れと畏敬の念で仰いでいた。このときは、先生から直接のご指導を頂けるようになろうとは、夢想でもしなかった。その契機を与えてくれたのは、中央公論社で新書の編集を担当していた加

伏見先生にお近付きを得て……………中村義作…1
曲り角で出会う人……………森 一久…4
驢馬電子に引れて……………有馬朗人…5

みすず書房
東京都文京区
本郷 3-17-15

納信雄さんである。

確か昭和五十三年の暮近く、私の耳を疑うような電話を加納さんから頂いた。当時、日本学術会議の会長の要職にあられた伏見先生と、夢のある独創的な絵で親しまれている安野光雅画伯と、私の三人で、幾何学に関する鼎談形式の本を出版したいから、上京してもらいたいとの内容である。加納さんとは、中公新書の出版で二回ほどお世話になっていたので、知己の間柄である。しかし、今回のお話はどう考えても荷が勝ちすぎる。とても期待に応えるような仕事はできないと辞退したが、とにかく上京するようにとの誘いに応ずることとした。なにしろ、高名な伏見・安野の両先生にお引合わせを頂けるだけで、私には大変な光栄である。一生懸命努力すれば、多少のお手伝いはできるのではないかと私なりに考えた。加納さんに鼎談の主旨を聞くと、伏見先生の「紋様の科学」をベースに話を展開させたいという。そこで、まずこれを勉強することにした。

「紋様の科学」は、日本評論社の数学セミナーに連載された伏見先生のご著作で、昭和四十二年五月から昭和四十四年十二月にかけての三十回の長期連載である。日本の家紋を題材の中心に据えて、模様様の美しさとその背後に潜む図形の数理をじつに広範多岐にわたって論及している。掲載當時も愛読していたが、もう一度読み直してみても、そのすばらしさを再認識した。それと同時に、伏見先生がどれほど幾何学図形に愛情を込められているかの一端を窺い知ることができた。並みの情熱と知識では、毎回六ページにも及ぶ論文を二年半以上も書き続けられるものではない。しかも、この連載が完結した後に、同系列の論文として、「四面体ころがし」、「角の生えたベントミノ」、「ドラゴンカーブ変換曲」、「宝結びの定理」、「M・C・エッシャー讃歌」、「亀甲の染め別け七色定理」、「伏見流祝儀袋」、「正多面体を折り紙で作ろう」、「寄木細工再論」、「M・C・エッシャーへの最後の挑戦」などをつぎつぎと発表しておられる。私はこれらの論文をすべて読み、伏見先生とお会いするときの心の準備とした。

約束の当日、少し早めに指定の場所に行って、伏見先生をお待ちした。テレビなどでお顔は存じ上げていたが、私などに鼎談の大役がうまく動まるだろうか、何か期待と不安の交錯する気持ちだった。しかし、先生が到着して初対面の挨拶を交しているうちに、私の不安は霧散した。先

生のお人柄というのか、知識をひけらかすことがなく、大学者という感じをまったく抱かせないのである。先生から見ると、私などは若輩の端くれにしか過ぎないのに、決して私を困らせるような話はしない。むしろ、「なるほど、なるほど」と頷いて、私を立てて下さるような態度をとる。一方の安野画伯も庶民的で、少しも飾り気のない話し振りである。こうして、私の予想を遙かに越えて、幾何学に関する鼎談は和やかな雰囲気ではじめられた。加納さんの見事な司会に助けられて、対称図形はなぜ美しいかを発端にし、ついで貝の外形に見られる対数螺旋線から植物の葉や果実に現れるフィボナッチ数へと進んでいく。話題は次から次へと展開し、止まるどころを知らない。この会話の中で、伏見先生がいかに幾何学を愛し、またどれほど造詣が深いかを再認識した。それにも増して、若輩にも目を掛けて下さる暖かいお人柄にすっかり惹かれてしまった。夕食をとる頃には、何年も前から伏見先生を存じ上げているような錯覚に駆られるほどであった。

鼎談は一日では終了せず、間を空けて何回か行われた。いつも楽しい雰囲気は終始し、私にとっては願ってもない経験であった。やがて、速記録が完成し、各人の発言に対する加筆修正と数学的な補足の作業が始まった。そうこうしているうちに、伏見先生から一通の手紙が届いた。黒姫の別荘に行くから、まとめの作業を一緒にしないかという

お招きである。黒姫は黒姫山の裾野に広がる高原で、近くに野尻湖を擁する絶好の別荘地である。先生は、この中の大学村に別荘を持っておられた。私が黒姫から車で一時間足らずの長野に住んでいるため、わざわざお招き下さったのである。早速にお伺いし、奥様の満枝先生ともお近付きを得た。満枝先生が有名な折り紙の研究者であられることは、雑誌などを通してかねてから知っていた。学究肌の女史タイプを想像していたが、お会いするとまったく違う。親しみのある気さくな話し振りで、こちらも気兼ねなしに話せる。いままさながら、伏見先生ご夫妻のお人柄に感服した。このため、夕食後の歓談は大変楽しいものであった。その日は深夜まで仕事をし、別荘で一泊させて頂いた。私にとって、大変な光栄である。このとき、康治・満枝両先生の署名入りで頂戴した『折り紙の幾何学』は、大切な家宝として書架に飾ってある。

伏見先生と安野画伯と私との鼎談形式による本は、中公新書の『美の幾何学』として、昭和五十四年十月に出版された。先生ご自身による「あとがき」を読むと、三人の鼎談を大変楽しまれたご様子である。私もよい勉強になったと感謝している。出版後、記念パーティを開くからといって、安野画伯と加納さんと私を横浜の大倉山マンションにご招待して下さい。三人は、招待すべきなのはわれわれの方ではないかと言いつつも、ご好意に甘えた。その晩

がいかに楽しいものであったかは、いうまでもない。もちろん、奥様の満枝先生も、手料理の合間を見ては私たちの歓談に参加された。

『美の幾何学』の仕事がご縁で、その後も伏見先生ご夫妻とお付き合いを頂くようになった。ご夫妻は、黒姫の別荘に毎年避暑に来られるが、その度に「中村さん、また黒姫に来ましたよ」と気軽に声を掛けて下さる。私は先生の都合をお伺いして、信州の名所旧跡をご案内するようにしている。これまでに戸隠、松代、小布施、山田牧場などを案内したが、先生ご夫妻は大変ご満足の様子である。ただ、私は車が運転できないため、信州大学の同じ研究室の小林俊子さんを毎回煩わしている。すると、先生は小林さんにまで細かい心遣いをして下さる。小林さんは、高名な伏見先生とお近付きになれるだけで光栄なのにと恐縮している。先生はそういうお人柄なのである。

最後に、少し専門的になるが、ペンローズの非周期的タイル張りについて触れておきたい。これは、正五角形の中に六個の小さな正五角形を埋め込むという操作の反復で、特異なパターンのタイル張りを完成させるものである。その特長は、規則正しいタイル張りであっても、決して周期的な繰り返し模様にならないというもので、結晶学の分野を築きつつある準結晶の理論の発端となった。イギリスの数学者ペンローズが一九七四年に発表したもので、実在

の準結晶が発見されてから大変な話題を呼んでいる。じつは、ペンローズの発表よりも五年前の一九六九年に、伏見先生が正五角形の中に六個の小さな正五角形を逐次に埋め込む構想を発表され、非周期的タイル張りの先駆的研究を行っている。ただ、もう一步の突込みが足らず、輝やかしい業績に結びつかなかった。かつて、私がそのことに触れると、「大魚を逸しましたかね」といって笑っておられた。私なら、もう少し自分の成果を吹聴しているだろうと思ひ、謙虚な言葉に学者としての先生を見た。どうぞ、お身体を十分にご自愛の上、益々ご活躍なされることを心からお祈りする。

(信州大学工学部教授)